

ふるさとの昔話



◁現在のからかさ木



丘地区の傘木からかさぎにちようと傘を開いたような木があります。昔、ここを通った源頼朝が傘がわりに雨宿りしたところといわれ、地名の由来になっています。

丘のからかさ木

大きな木に雨宿り

鎌倉時代、源頼朝は富士山の裾野で巻き狩り（けものを四方から取り巻き、捕らえる）をよく行いました。

巻き狩りの途中、大勢の家来を連れた頼朝が、ある村落に入ると、空がわか曇って、雨が降ってきました。

たまたま近くに大きな木があり、頼朝はその木の下に駆け込みました。からかさのように枝を広げた木は、雨宿りするにはちょうどよい木でした。

頼朝が命名

頼朝は通りかかった年寄りに、「この村の名は、何と言うのか」と尋ねました。年寄りは、「いまだに村の名前はついていません」

と答えました。すると頼朝は、「この木はからかさのかわりになつてくれた。村の名をからかさ木

としたらどうじゃ」と言いました。

老人は早速村人に話して、村の名をからかさ木村と呼ぶようにしました。

ロマンを感じるね

からかさ木を管理する望月忠男さん（六十五歳）は「昭和四十一年の台風二十六号で、先代の木が倒れてしまい、今の木は先代の根元から生えてきた四代目です。木はタブの木で、自然にからかさのようになっています。この木のそばを頼朝が通ったと考えるとロマンを感じるね。伝法の一万歩コースになり、最近訪れる人も多いよ」と語ってくれました。



望月忠男さん

地名の由来



蓼原村は非常に古くからの村です。江戸時代の初めのころ、古郡氏が加島新田を開発したときは、既に村として成立していた、その石高は千石以上でした。江戸時代には東海道の沿線の村として繁栄しました。村名の「蓼原」と言うのは、一説では、この付近にタデが多く生えていたので蓼原村と呼んだと言われます。

こちら編集室

さて、もう九月。ことは、セミの鳴き声も、海も、頭がジーンとくるかき氷も体験せずに秋を迎えてしまいました。ギラギラ輝く夏の太陽にあまりお目にかかれなかったのは残念ですね。「やはり夏は暑くなければ、のひとり言に編集長は「去年の猛暑のとき、『暑い夏はもうこりこり』と言ったのはだれだ」ときついお言葉。

ニイハオ 你好



嘉興市

▽嘉興市の中学校における語学学習



嘉興市のことば

中国には日本の25倍を超える国土に約11億の人々が生活しています。昔から、山一つ隔てれば、また、川一つ隔てれば言語も風俗も異なると言われるお国柄だけに、言葉を取り上げてても大きな違いがあります。

一口に中国語と言いますが、北と南とはまったく違う言葉です。

上海に近い嘉興市は、言語的に言えば「呉方言」つまり上海語圏に入ります。

私たち外国人が一般に中国語として学ぶ「普通話」は、方言の中でも最も代表的な北京語とほぼ一体をなすもので、標準語といえます。

標準語は嘉興市初め浙江省の全域でも、公式の場やテレビ・ラジオ等で使われていますが、市民が一般的に使っているのは上海語に近い言葉です。

しかし、市内の小中学校では「普通話」教育が徹底しています。